

朝日大学附属病院小児歯科における初診患者の実態調査

山崎 裕司 齋藤 尚則 西田 宜弘 西田 淑江
杉本 勘太 多賀谷 正俊 山田 賢 近藤 亜子
長谷川 信乃 飯沼 光生 田村 康夫

An Investigation of First Visit Patients at the Pediatric Dentistry Clinic of Asahi University Dental Hospital

YAMASAKI HIROSHI, SAITO NAONORI, NISHIDA YOSHIHIRO, NISHIDA YOSHIE, SUGIMOTO KANTA,
TAGAYA MASATOSHI, YAMADA SATOSHI, KONDO TSUGUKO, HASEGAWA SHINOBU,
IINUMA MITSUO and TAMURA YASUO

朝日大学附属病院小児歯科の現状と問題点を抽出し、その改善について検討することを目的として、2004年度における初診患者の動向について主な項目については1981年を対照に検討を行った。その結果、以下の結論を得た。

1. 月別初診患者数は、ほぼ一定で、1981年と比較すると乳歯列期完成前の患者が増加している傾向を示した。
2. 本院が所在する瑞穂市周辺の来院が多くみられるが、他県からの来院もあった。
3. 処置内容では、1981年に比べ、う蝕処置を主訴とする割合が減少し、予防処置、口腔内検診・管理の割合が増加していた。
4. 乳前歯の治療はレジン修復と交換期障害による抜歯、乳臼歯は修復処置が多く、また永久歯に対してはシーラント処置が多く行われていた。
5. 治療後の対応として定期的な口腔管理を希望する患児が約6割みられた。

キーワード：小児歯科，初診患者，実態調査

The purpose of this study was to clarify the trend of first-visit patients of Pediatric Dentistry of Asahi University Dental Hospital in 2004.

The results obtained were as follows;

1. *The number of first-visit patients the month was approximately constant, and the first-visit patients before completion of the deciduous teeth dentition period increased.*
2. *Many first-visit patients lived around Mizuho City. Some of them visited from other prefectures.*
3. *Concerning chief complaints, caries treatment decreased in 2004 compared with that 1981. Regarding preventive treatment, oral examination and management increased.*
4. *Many treatments of deciduous anterior teeth involved resin fillings and extractions in the exfoliation period, and those of the deciduous molar involved restoration. Many permanent teeth were treated by sealants.*
5. *About 60% of patients desired the periodical oral recall after treatment.*

Key words: Pediatric Dentistry, First-Visit Patients, Investigation into the Actual Condition

緒 言

朝日大学附属病院小児歯科は1971年に開設され、本

年で35年目を迎えることとなった。その間、少子高齢化が進行し小児を取り巻く社会環境が著しく変化してきている。近年の小児歯科臨床は、重症う蝕が少なく

なり、その結果う蝕処置が減少し¹⁾、予防や歯列育成が重点となってきた²⁻⁶⁾といわれている。本学附属病院小児歯科は二次、三次病院として地域と連携し小児に対する高度な歯科治療を提供するとともに教育病院として、学生の教育、指導する責務を有している。また、2006年度からは研修医制度が必修化されることから、附属病院全体としての改革が求められている。そのためにも現在の患者動向の実態を把握し、問題点を明らかにし、改善していくことが重要であると考えられる。そこで今回我々は、2004年度の朝日大学附属病院小児歯科における初診患者の実態調査を行った。なお、年間の初診患者数が類似している1981年を対照として比較検討した。

調査対象および調査項目

調査対象は、2004年4月1日から2005年3月31日の一年間に朝日大学附属病院小児歯科外来を受診した初診患者677名（男児381名、女児296名）である。

調査項目は、診療録および予約票をもとに、患者数、住所、生年月日、初診日、本院への受診を選んだ理由、主訴、口腔状態、処置内容、処置後の対応とした。分析は、1971年から2004年までの初診患者数の推移を分析した後、年間の初診患者数が比較的類似している1981年（初診患者数790名、男児434名、女児356名）の患者動態を再調査し対照年とした。その際、1981年度のデータが不充分であった以下の項目、地域分布、本院への受診を選んだ理由、口腔内の状態、処置内容、処置後の対応については両者の比較は行わなかった。

結 果

1) 初診患者数の年度別推移

図1には、朝日大学附属病院小児歯科が開設された1971年から2004年までの34年間における初診患者数の年度別推移を示す。1977年の年間1534人をピーク以降は減少傾向を示したが、1990年から緩やかではある

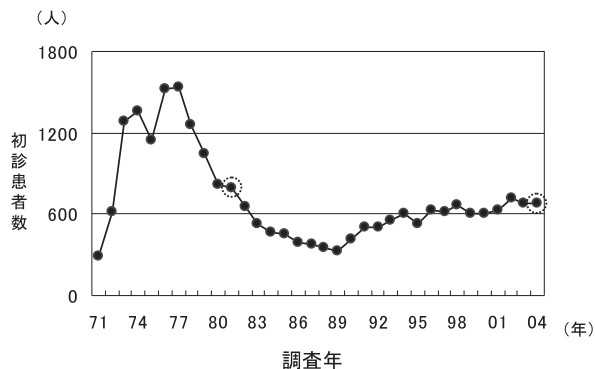


図1 初診患者数の推移 (年度別)

が増加傾向を示している。2004年度の患者数は1981年とほぼ同数（790名、男児434名、女児356名）を示した。

2) 月別の初診患者数

月別の初診患者数は1981年度では、学休期である7、8月や3月に来院数が増加するが、翌月には来院数が減少する傾向を示していた。しかし、2004年度は各月ともほぼ一定した来院数を示していた（図2）。

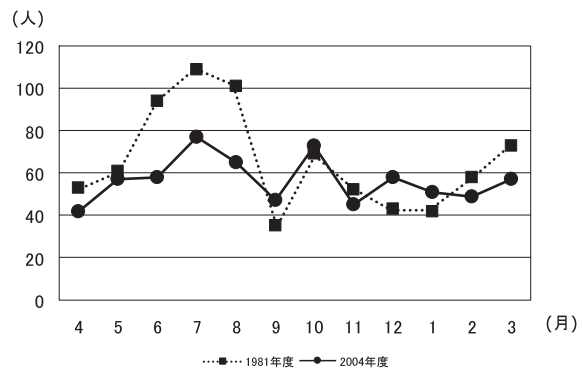


図2 初診患者数 (月別)

3) 年齢分布

歯列変化にあわせて0～2歳（ⅠC期）、3～5歳（ⅡA期）、6～12歳（ⅡC～ⅢB期）、13歳以上（ⅢC期～）に分類して検討した。1981年度は3～5歳が多く45.3%だったが、2004年度では30.0%に減少していた。その一方、乳歯列完成前期にあたる0～2歳は1981年度では13.0%であったものが2004年度では24.8%に増加していた（図3）。

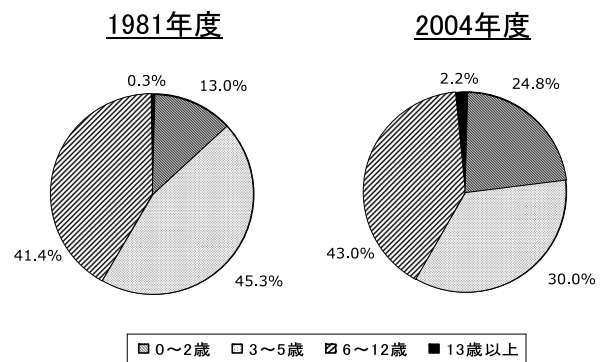


図3 年齢分布

4) 地域分布

朝日大学附属病院のある瑞穂市と隣接する岐阜市、大垣市、本巣市からの初診患者が、全体の約75%を占めていた。また愛知県、三重県、滋賀県といった隣県からの来院もみられた（表1）。

5) 本院への受診を選んだ理由

兄弟が通院しているからが25.7%、知人から聞いて

は22.3%，歯科医院からの紹介が22.0%，祖父母など家族が通院しており，本院を勧められたためが20.2%と，ほぼ同程度の割合を示していた（図4）。

表1 地域分布（2004年）

患者数（名）	対人口比	人口（名）	患者数（名）	
岐阜市	150 (22.2%)	405294	関市	11
瑞穂市	132 (19.4%)	47320	養老郡	11
大垣市	69 (10.2%)	154787	三重県	5
安八郡	49 (7.2%)	50111	郡上市	4
本巣市	39 (5.8%)	35113	滋賀県	3
揖斐郡	38		可児市	2
羽島市	27 (4.0%)	68422	加茂郡	2
羽島郡	27 (4.0%)	68279	美濃市	2
本巣郡	24 (3.5%)	17667	山県市	2
各務原市	20		多治見市	1
愛知県	17		中津川市	1
海津市	15		瑞浪市	1
不破郡	14		美濃加茂市	1

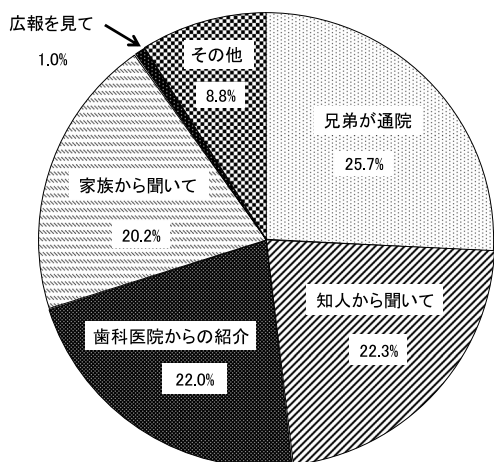


図4 本院選択の理由

6) 主訴

う蝕処置が最も多いが，その割合は1981年では71.6%を示していたが，2004年では33.0%に減少し，その代わりに，ブラッシング指導やフッ素塗布といった予防処置が22.9%，口腔内検診・管理の割合が17.6%と増加していた。歯並びに関してはわずかではあるが増加していた（図5）。

7) 口腔内の状態

う蝕歯数は乳歯・永久歯とも0本が最も多く，多数歯に及ぶう蝕を有する患児はごく少数であった。また処置歯数も0本が多かった（図6）。しかし，初診にう蝕を有していた患児の中には口腔内検診を主訴に来院し，口腔内検査の結果う蝕がみつかったという例も

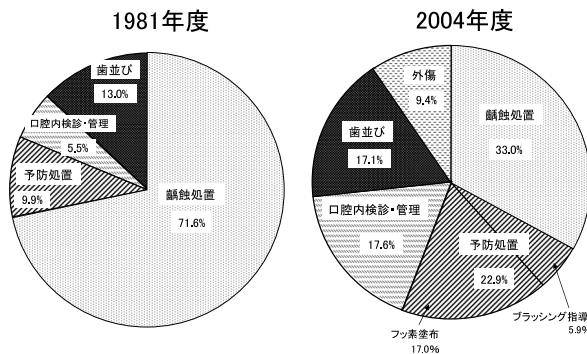


図5 主訴

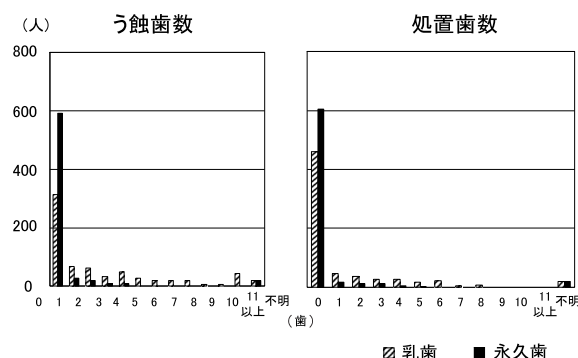


図6 初診時の口腔状態（2004年度）

含まれていた。

8) 処置内容

乳歯において前歯部では修復処置と交換期障害による抜歯が同程度であった（フッ化ジアンミン銀塗布は今回の調査からは除いた）。また臼歯部では修復処置が60%を占めていた。永久歯では前歯は修復処置の51.5%が最も多く，臼歯部はシーラントが53.4%，修復処置が45.9%であった。修復処置に関してはコンポジットレジン修復やガラスイオノマー修復が乳歯・永久歯ともに半数程度を占めており，インレーや金属冠のような金属を用いる処置は少数であった。以上のことから処置内容としては，予防処置や，軽度のう蝕

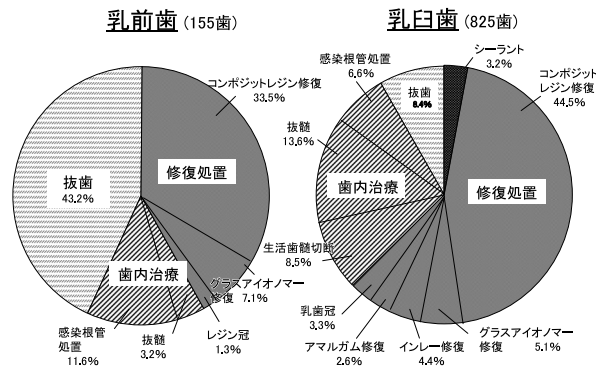


図7 1 乳歯の処置内容

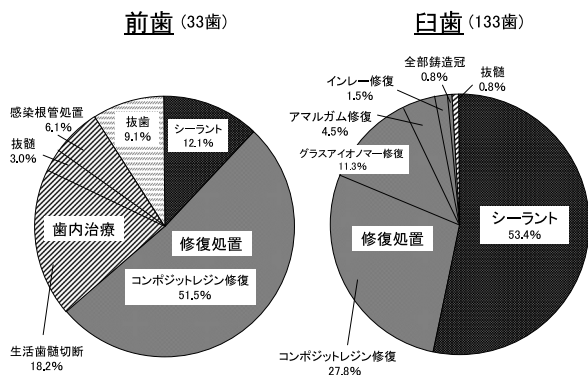


図7 2 永久歯の処置内容

に対する処置内容が大部分であった(図7 1, 2)。
9) 処置後の対応

定期検診が54.6%, 管理コースが8.3%を示していた。管理コースとは、本学附属病院小児歯科で行っている歯科衛生士による口腔衛生指導と歯科医師による口腔管理を定期的に行っていくコースであり、定期検診の一部とも考えられる。このことから、初診での治療を終了した後も口腔管理を希望する保護者が6割以上を占めていることがわかる。しかしその一方で、診療途中で来院しなくなった患児が15.2%を占めていた(図8)。

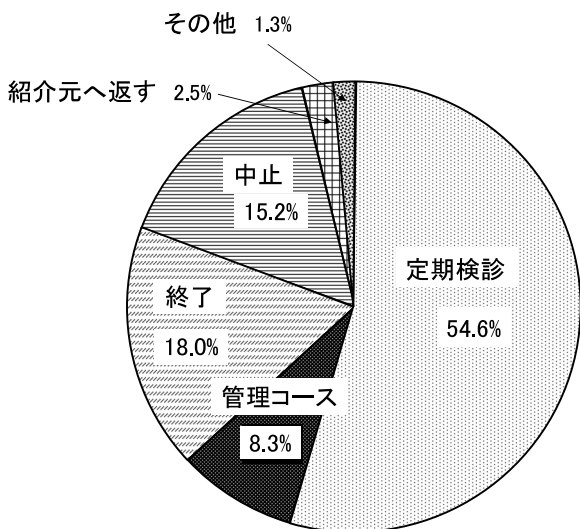


図8 初診治療後の対応

考 察

初診患者数は、朝日大学附属病院小児歯科の開設当初(1971年)から、年々増加を示し1977年に最高の1534人となったが、その後減少傾向を示していた。この時期における減少傾向は初診後治療開始までウェイトニングが半年から1年であったことや、加藤ら²⁾が考察しているように、従来の教育機関としての治療システ

ムに対する不満の蓄積が原因の一つとして挙げられる。実際に、1990年から臨床実習において学生による患者治療を控えるようにしたが、その後、再び増加傾向を示している。大学附属病院は教育病院としての一面を有していることから、学生の病院実習と患者のあり方を検討し直す必要がある。しかも、2006年度からは卒業研修が義務化されたことから、教育病院のあり方自身を再考する時期にあると考えられる。この減少傾向は、本学のみではなく、他大学においても同様の傾向を報告している⁷⁾。岐阜県における出生率は1967年から1974年ころをピークに減少傾向を示し、この減少傾向は現在まで継続している。しかし、本学小児歯科への初診患者数は1989年を初診患者数の下限をむかえるが、その後は出生率の減少にもかかわらず増加を示している。

対照群とした1981年においては、7、8月および3月に患者数が増加し、翌月に患者数の減少がみられたのは、本学附属病院の診療時間は午前9時から午後4時までとなっており、小学校、特に高学年以上になると通院することが困難となっている。このため、長期休暇を利用し来院する患者が多く、7、8月や3月に初診患者数の増加がみられ、長期休暇の終了した翌月には患者数の減少傾向を示していたものと考えられる。しかし教育制度の改革によって、小、中、高等学校は1995年からは、第2、4土曜日が休日となり、2002年からは毎土曜日が休日となった。このため、小学校高学年以上の者であっても、長期休暇でなくとも土曜日を利用して通院することが可能となったことによって長期休暇期間における来院患者の集中が減少してきたと考えられる。

6～12歳の学童期の来院数は1981年が41.4%、2004年43.0%であり、6歳未満の来院数は、1981年が58.3%、2004年54.8%とあまり変動がみられなかった。しかし、さらに年齢を分けてみると、0～2歳が1981年では13.0%であったものが2004年度では24.8%に増加している。この原因としては、来院時の主訴との関連性が考えられる。来院時の主訴としては、2004年度においてもう蝕処置が33.0%と最も多かったが、1981年度の71.6%と比較して大きく減少している。この傾向は、初診患者の動向調査を行った各報告とも同様に、う蝕処置は減少しているものの、主訴としては依然最も多いという結果が得られている^{6,8,9)}。宮田ら⁹⁾は1980、1988、1996年の比較を報告し、う蝕処置が、最も減少傾向を示していることを報告している。これに対して、予防処置が9.9%から22.9%に増加しており、また口腔内健診・管理が5.5%から17.6%へと増加している。この要因の一つとして、う蝕の軽微化¹⁾

が考えられ、また他の要因として、保護者が乳歯列の完成前から歯および歯列に関心をもち、フッ素塗布や口腔管理を希望して来院することが多くなっている¹⁰⁾ためと考えられる。さらに、初診時の口腔状態としてはう蝕が0本であった患者が多く、臼歯部では、乳歯、永久歯ともに処置内容として予防処置が最も多かったこととも関連していると考えられる。

地域分布は、本教室の加藤ら²⁾が2000年に行った報告とほぼ同様の結果を得た。この5年間においても、周辺地域の公共交通機関にさほど変化はなく、最も近くにあるJR穂積駅からのバスの本数が増加してはいるものの周知されているとは言い難く、通院手段としては自動車に頼らなければならないのが実情であり、今後公共交通機関の充実がなければこの傾向は変化しないものと考えられる。

治療終了後の対応としては、3か月ごとあるいは学休日に来院してもらって定期検診へと移行する患者が54.6%と最も多かった。また、低年齢の患児を対象に、歯科衛生士による刷掃指導を中心とした管理コースへと進む患者も8.3%みられた。このことから、60%以上の患者は定期的な口腔管理へと移行していた。しかし、終了(18%)あるいは途中で中止(15.2%)となる患者がみられた。定期管理の問題点として、細矢ら¹¹⁾は低年齢児ほど継続率が高く、年齢が上昇するにつれて減少する。同様に浜田ら¹²⁾は初診時年齢が高くなるほど定期管理の継続期間が短縮することを報告している。また、中尾ら¹³⁾は治療内容との関連として齲蝕や外傷での来院の場合には継続率が高いことを報告している。今回、患者の年齢や治療内容との詳細な検討を行っていないが、中止してしまう原因について検討し、中止の割合を減少させていくことが今後の課題の一つであると考えられる。また、来院時間や自宅からの距離といった問題等であれば、積極的に近医を紹介し、継続した口腔管理を行ってもらうことが必要であるとも考えられる。

結 論

今回、本学附属病院小児歯科の現状について検討し、その問題点を検討するために、2004年度の初診患者677名(男児381名、女児296名)を対象に実態調査を行い、一部項目については1981年と比較し、以下の結果を得た。

1. 月別の初診患者数はほぼ一定した傾向を示し、1981年に比較して乳歯列期完成前の患者が増加していた。
2. 本院が所在する瑞穂市周辺の来院が多くみられた。

3. 処置内容では、1981年と比較してう蝕処置を主訴とする割合が減少し、予防処置、口腔内検診・管理の割合が増加していた。
4. 乳前歯の治療はレジン修復と交換期障害による抜歯、乳臼歯では修復処置が多く、永久歯ではシーラント処置が多くなっていた。
5. 治療後の対応として定期的な口腔管理を希望する患児が約6割みられた。

尚、本論文の一部は第24回日本小児歯科学会中部地方会(平成17年11月13日、福井)において発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省医務局歯科衛生課. 平成11年歯科疾患実態調査報告. 口腔保健協会: 東京; 1999; 13-38.
- 2) 加藤千恵, 尾辻 渉, 安井清子, 原田 洋, 中西正尚, 龍崎健栄, 辻 甫, 田村康夫. 朝日大学歯学部附属病院小児歯科外来における15年間の初診患者の実態調査. 小児歯誌. 2000; 38: 47-50.
- 3) 今村治代, 辻野啓一郎, 望月清志, 大多和由美, 薬師寺 仁. 歯科大学病院小児歯科における平成8-10年度初診患者の実態調査. 小児歯誌. 2002; 40: 148-154.
- 4) 泉福浩志, 尾崎正雄, 久保山博子, 本川 渉. 福岡歯科大学附属病院小児歯科外来における初診患者の実態調査. 福岡歯学会誌. 2002; 29: 245.
- 5) 佐藤麻美, 畑 弘子, 船山ひろみ, 高橋 温, 真柳英昭. 本学小児歯科外来における初診患者の実態調査. 小児歯誌. 2003; 41: 17-23.
- 6) 菊地友絵, 八若保孝, 中尾加代子, 弘中祥司, 加我正行, 小口春久. 本学歯学部附属病院小児歯科における最近5年間の初診患者の実態調査 1. 初診時について. 小児歯誌. 2003; 41: 271-277.
- 7) 鈴木伸枝, 奥村恵子, 太田浩世, 大竹由美子, 阿部敏子, 伊藤寿季子, 福田 理. 小児歯科外来における初診患者の来院動機の変化. 日本歯科衛生士会学術誌. 1987; 15: 110-115.
- 8) 宮田秀昭, 大塚由美子, 佐野富子, 田中裕子, 田邊義浩, 田口 洋, 野田 忠. 新潟大学小児歯科外来における初診患者の実態調査 1980年, 1988年, 1996年の比較. 小児歯誌. 1998; 36: 652-659.
- 9) 丹羽英之, 中野 崇, 柴田宗則, 徳倉 健, 土屋友幸. 2003年度本学歯学部附属病院小児歯科外来における初診患者の実態調査. 愛院大歯誌. 2005; 43: 225-231.
- 10) 島 博史, 米津卓郎, 望月清志, 町田幸雄. 本学小児歯科学講座開設当時と現在における小児患者の来院動機の変化について. 歯科学報. 1991; 91: 765-773.
- 11) 細矢由美子, 國松尚美, 古後史子, 平田康博, 古後泰彦, 後藤讓治. 本学小児歯科外来患者の定期診査受診

- 状況 . 小児歯誌 . 1987 ; 25 : 156 168 .
- 12) 浜田作光 , 松原 聡 , 杉村和昭 , 祝部竜三 , 内村 登 .
本学小児歯科外来における定期管理受診状況第 1 報
定期管理受診状況の実態とその継続期間について . 小児歯誌 . 1997 ; 35 : 53 60 .
- 13) 中尾加代子 , 八若保孝 , 菊地友絵 , 弘中祥司 , 加我正
行 , 小口春久 . 本学歯学部附属病院小児歯科における
最近 5 年間の初診患者の実態調査 2 . その後の定期
管理状況について . 小児歯誌 . 2003 ; 41 : 278 284 .
-